

# ドイツ語のなかの杜甫

—堀辰雄の「杜甫訳詩」とのかかわりを中心に—

長谷部 剛

## Du Fu in German

—Focusing on the Connection

with Hori Tatsuo's Japanese Translations of Du Fu's Poems

HASEBE Tsuyoshi

Hori Tatsuo (1904–53) left four handwritten notes concerning classical Chinese poetry. This paper focuses on one of these, Hori's notes for translations of the Tang-dynasty poet Du Fu's poems, demonstrating that Hori's manuscript is in fact based on a Hans Bethge's 1922 German translation of classical Chinese poetry, *Pfirsichblüten aus China*; it also points out editorial issues in the deciphering and transcription of Hori's notes for publication in *Hori Tatsuo zenshu*, the 1980 Chikuma Shobo edition of Hori's collected works.

『堀辰雄全集』第七卷（下）（筑摩書房、1980年6月）は、①支那古詩（一）、②支那古詩（二）、③杜甫訳詩、④支那古詩抄、の四種を収録する。いずれも堀辰雄（1904-1953）の中国古典詩歌に関するメモ、口語訳である。これらは自筆ノートとして遺されたもので、単独で出版・公開されることがなかったばかりか、角川書店版『堀辰雄全集』（1963～66年）にも収録されることはなかった。

②支那古詩（二）・③杜甫訳詩はともに杜甫詩の口語訳と言えるもので、これらに注目して整理・論述したものに、

1. 内山知也「堀辰雄の《支那趣味》」（『日本近代文学』第14集所収、1971年5月）
2. 内山知也「堀辰雄の《杜詩訳稿》」（『日本近代文学』第17集所収、1972年10月）
3. 内山知也『堀辰雄 杜甫詩ノオト』（木耳社、1975年12月）

がある。この三者はすべて、筑摩書房版『堀辰雄全集』が出る前に、堀辰雄の多恵子夫人に自筆ノートおよび蔵書類の閲覧を許された内山氏が自筆ノートを判読して翻字し、さらに注解を加えたものである。内山氏の3.『堀辰雄 杜甫詩ノオト』は、『堀辰雄全集』②支那古詩（二）に収められる杜甫詩15首すべての口語訳を収めるが、③杜甫訳詩については、以下のように述べる。

また別のノート断簡〔引用者注、③杜甫訳詩を指す〕は「支那古詩」ノートより一層判別しにくい鉛筆書きである。それは、19.2cm×13cm大で、二十二葉より成りすべて杜甫の詩「秋の逍遙」「晚帰」「舟上の美人」「若き日の友に」「古城址にて」「秋」「歎き」「李太白を憶ふ」「痛しき追憶」「異郷の想」「佳人の歎き」「王宰の画に題す」「新婚の婦は歎きぬ」「放逐せられし李白に」「李太白に」の十五首を記しているが、訳文はまだ堀辰雄独自の流暢さを持つに至らず、完成度の低いものである。したがって、その中でも判読が可能で、訳文の安定したもの二首〔引用者注、「王宰の画に題す」「放逐せられし李白に」〕だけを選んで「補遺」とした。これらの原詩は成立年代もまちまちである。

すなわち、③杜甫訳詩の15首のうち、1975年の3.『堀辰雄 杜甫詩ノオト』では「王宰の画に題す」「放逐せられし李白に」の二首のみを翻字・掲載するにとどまったが、1980年の筑摩書房版

『堀辰雄全集』ではのこりの13首が新たに判読され掲載されているのである。

本稿は上記の内山氏の三種の成果で詳しくは顧みられることのなかった③杜甫訳詩に注目し、この杜甫詩訳稿が、中国古典詩歌のドイツ語訳である、Hans Bethgeの *Pfirsichblüten aus China* (1922) からの翻訳であること、そして、このノートを判読・翻字した1980年筑摩版『堀辰雄全集』には注意すべき問題があることを指摘するものである。

## 二

Hans Bethgeの *Pfirsichblüten aus China* は、“*Nachdichtungen Chinesischer Lyrik*” の副題をもち、1922年ベルリンの Ernst Rowohlt Verlag から出版された。『詩経』・漢高祖劉邦・楊炯・王勃・張若虚・宋之問・崔護・孟浩然・李白・杜甫・王昌齡・韋応物・白居易（楽天）・高適・岑参・儲光羲・蘇軾（東坡）・李清照（易安）などの中国詩92首のドイツ語訳を収める。

Hans Bethge (1876-1946) について、富士川英郎「李太白とドイツ近代詩」（玉川大学出版部、1974年5月）は、

ドイツ文学史上の所謂<sup>ノイ・ロマンティック</sup>新浪漫派、もしくは印象主義に属していた群小作家のうちのひとり、詩も小説も戯曲も書き、さらにヤコブセンやヘルダーリンを論じたエッセイの類いも書いたが、彼の名が今日もなお伝わっているのは、専らその訳詩集『シナの笛』（*Die chinesische Flöte*, 1907）と『日本の春』（*Japanischer Frühling*, 1911）という二冊の著書によるのだと言ってもいい。彼の『シナの笛』は、これもクラブントの場合と同じく、フランス語のシナ詩歌集やハイルマンをもとにして、それをかなり自由に改作したものである。

と紹介する。Bethgeの *Die chinesische Flöte* は、Gustav Mahlerの交響曲「大地の歌」（Lied von der Erde, 1908）の歌詞に用いられたことでよく知られる<sup>1)</sup>が、1922年の *Pfirsichblüten aus China* もまた、中国詩のフランス語訳に基づいたドイツ語訳である。唐詩については、同書の巻末に、Hervey-Saint-Denys: *Poésies de l' époque des Thang.*, Paris, 1862 と Judith Gautier: *Le Livre de Jade, Poésies traduites du Chinois.*, Paris, 1867の、唐詩フランス語訳二書に拠ったことが明記される。*Pfirsichblüten aus China* は李白を15首、杜甫を17首採っており、同書のなかで李白と杜甫が中心的な位置を占めている。

上掲の内山氏論文1.「堀辰雄の《支那趣味》」では、堀辰雄が生前所蔵していた *Pfirsichblüten aus China* を調査しており、それによると、堀は94首のドイツ語訳のうち17首については、中国の原詩を推定し同書の余白に朱筆で詩人名と詩題、および詩本文を記しているという。

以下、その17首と杜甫の詩については17首全首を表にして掲げる（その17首と杜甫詩は多くが重なることに注意されたい）。なお、下表の\*が附せられた杜甫詩については、堀辰雄ではなく、本稿の筆者がドイツ語と堀辰雄の杜甫訳詩を参考に杜甫の原詩を推定した。

Hans Bethge : <i>Pfirsichblüten aus China</i>			堀辰雄推定の中国詩原詩 (*は除く)	堀辰雄③ 杜甫訳詩
	詩人名	詩題		
(1)	Wang-Po	Der Pavillon des Jungen Königs	王勃「滕王閣」(滕王高閣臨江渚)	
(2)	Yang-Khiong	Kriegsbeginn	楊炯「從軍行」(烽火照西京)	
(3)	Mong-Kao-Jen	Idyll	孟浩然「過故人莊」(故人具雞黍)	
(4)	Oei-Ying-Wöe	Die Einsamkeit	韋応物「幽居」(貴賤雖異等)	
(5)	Thu-Fu	An Li Tai Po	*杜甫「寄李十二白二十韻」(昔年有狂客)	[5] 李太白に
(6)	Thu-Fu	Bei Sonnenun-tergang	杜甫「落日」(落日在簾鉤)	
(7)	Thu-Fu	Klagen einer schönen Frau	杜甫「佳人」(絶代有佳人)	[1] 佳人の歎き
(8)	Thu-Fu	Auf ein Bild des Males Wang-Tsai	杜甫「戲題王宰画山水図歌」(十日尽一水)	[2] 王宰の画に題す
(9)	Thu-Fu	DieNeuvermählte Klagt	杜甫「新婚別」(兔糸附蓬麻)	[3] 新婦は歎きぬ
(10)	Thu-Fu	Schlaflos	杜甫「春宿在省」(花隠掖垣暮)	
(11)	Thu-Fu	Herbstwanderung	杜甫「登高」(風急天高猿嘯哀)	[6] 秋の逍遙
(12)	Thu-Fu	An den Verbann-ten Li-Tai-Po	杜甫「夢李白」(死別已吞声)	[4] 放逐されし李白に
(13)	Thu-Fu	Abendlicher Spaziergang	*杜甫「野望」(清秋望不極)	[7] 晚帰
(14)	Thu-Fu	An einen Jugend-freund	*杜甫「贈衛八処士」(人生不相見)	[13] 若き日の友に
(15)	Thu-Fu	Die Frau auf dem Blumenboot	*杜甫「麗人行」(三月三日天氣新)	[8] 舟上の美人
(16)	Thu-Fu	Herbst in der Fremde	*杜甫「秋興八首」其一「玉露凋傷楓樹林」	[14] 異郷の愁
(17)	Thu-Fu	Schmerzliche Erinnerung	*杜甫「秋興八首」其八「昆吾御宿自逶迤」	[12] 痛しき追憶
(18)	Thu-Fu	Sehensucht nach Li-Tai-Po	杜甫「春日憶李白」(白也詩無敵)	[9] 李太白を憶ふ
(19)	Thu-Fu	Biage	*杜甫「秋興八首」其三「千家山郭靜朝暉」	[10] 歎き
(20)	Thu-Fu	Herbst	*杜甫「秋興八首」其六「瞿唐峽口曲江頭」	[11] 秋
(21)	Thu-Fu	In den Ruinen ein-es salten Schlosses	杜甫「玉華宮」(溪回松風長)	[15] 古城址にて
(21)	Wang-Tschang-Ling	Die Mädchen und die Lotosblüten	王昌齡「採蓮曲」(荷葉羅裙一色裁)	
(22)	Kao-shi	Die Letzten Trümmer	高適「宋中」(梁王昔全盛)	
(23)	Tschü - Kuang-Hi	In Reichen Hause	儲光義「田家雜興」(種桑百余樹)	
(24)	Tsing-Tsang	Ein Frühlingst-raum	岑參「春夢」(洞庭昨夜春風起)	

すでに述べたように、*Pfirsichblüten aus China* は唐詩のフランス語訳をさらにドイツ語に訳したものである。そして、同書には中国詩の原文が示されていない。堀辰雄は、同書中のドイツ語訳がもとはどの唐詩人のどの詩篇であるのか、上表のように推定しているのである。しかしながら、杜甫詩については17首すべてに朱筆が施されているわけではない。朱筆のない（\*の附された）これら7首は、「杜甫の原詩→フランス語→ドイツ語」という経路を経ており、しかも、Bethge が依拠したところのフランス語訳——例えば Judith Gautier の *Le Livre de Jade, Poésies traduites du Chinois*——の段階ですでに原詩から大きく逸脱された訳詞となっているために、堀辰雄は原詩を特定しえなかったのであろう。

たとえば、(15) <Die Frau auf dem Blumenboot>。堀辰雄③杜甫訳詩 [8] 「舟上の美人」はこれを和訳したものである。

## (15) &lt;Die Frau auf dem Blumenboot&gt;

AUF diesem Boote weilt die schönste Frau, —  
Dem Fühlerpaar der der Schmetterlinge sind  
Die Bogen ihrer Brauen zu vergleichen.

Sie singt, sich auf der Flöte selbst begleitend,  
Ein Lied der Schwermut ; alle Götter hören  
Auf ihren Wolken tief ergriffen zu.

“Ich bin wie eine arme Blume, die  
Man in den Schmutz warf; keiner nimmt auf,  
Man geht vorüber, ohne mein zu achten.

Das Reisfeld, das sich leicht im Wind bewegt,  
Ist glücklicher als ich; wenn sich die Halme  
Auftum, meint man ein Lächeln drin zu sehn.

Ich selber abar lächle schon seit langem  
Nicht mehr; mein junges Angesicht ist düster,

## [8] 「舟上の美人」

この舟の上には、美しい  
女が載ってゐる、——彼女の  
眉の弓は蛾の触角に似て  
ゐる。

彼女は笛に合はせながら、  
憂愁の歌をうたふ。神人は  
雲の上からそれを深く感動  
して聞いてゐる。「私は塵芥  
の中に浮かべられた、貧し  
い花のやうだ。誰も私を拾  
つてくれない、人はこれに  
目もくれないで、通り過ご  
してしまふ。風に軽く顫る  
へ〈て〉ゐる田園も、私よ  
りは倅せだ。茎が開くとき、  
人はそこに微笑を見るやう  
にみせる。私はもうずっと  
前から一度も笑つたことが

Nur Eine Hoffnung schwebt noch durch mein Herz:  
 Daß bald ein schlanker Jüngling kommen wird,  
 Der nimmt die seidne Schnur, mit der mein Fahrzeug  
 An dieser Küste festgekettet ist,  
 Und leitet, wie der holdeste der Genien,  
 Mich elend Wesen an ein bessres Ufer,  
 Wo mir ein neuer Himmel leuchten wird.”

ない。私の若い顔はものかなしげだ、ただ或る希みだけが私の胸をつき上げてくる。——やがて瀟洒な青年が来てくれて、私の舟がこの岸に結ばれてた□□□をとつてくれるだらう。そして、もつとも情けぶかい妖怪のやう〈な〉私のみじめな存在を、よりよい岸へつけてくれるだらう。

Bethge の (15) <Die Frau auf dem Blumenboot> は、Gautier のフランス語訳 <Le Bateau des fleurs> に基づくものと考えられる。Bethge は *Pfirsichblüten aus China* において、Gautier, *Le Livre de Jade* の1867年版に拠ったのであるが、筆者は今回それを披見し得なかったので、門田眞知子『クローデルと中国詩の世界—ジュディエット・ゴーチェの『玉書』などとの比較—』(多賀出版、1998年2月)所掲の「補録 ジュディエット・ゴーチェの『玉書』の原詩と原詩人—1902年の改訂版に基づいて—」を参考にした。1902年版の *Le Livre de Jade* には、杜甫 (Thou-Fou) の詩として <Le Bateau des fleurs> があり、“Sur ce bateau, est la plus belle des femmes …” より始まる。詩題と言い、詩本文冒頭の一行と言い、<Le Bateau des fleurs> こそが、(15) <Die Frau auf dem Blumenboot> の原拠であることはあきらかであろう。では、<Le Bateau des fleurs> は杜甫のどの詩をフランス語訳したものであろうか、門田眞知子『クローデルと中国詩の世界』207頁は「麗人行」と比定する。

「麗人行」<sup>2)</sup>

三月三日天氣新  
 長安水邊多麗人  
 態濃意遠淑且真  
 肌理細膩骨肉勻  
 繡羅衣裳照暮春  
 蹙金孔雀銀麒麟

三月三日 天氣新たなり  
 長安 水辺 麗人多し  
 態は濃かに 意は遠くして淑且つ真に  
 肌理は細膩にして 骨肉は勻し  
 繡羅の衣裳は暮春を照らす  
 蹙金の孔雀 銀の麒麟

頭上何所有  
 翠微匳葉垂鬢脣  
 背後何所見  
 珠壓腰極穩稱身  
 就中雲幕椒房親  
 賜名大國號與秦  
 紫駝之峰出翠釜  
 水精之盤行素鱗  
 犀箸厭飫久未下  
 鑿刀縷切空紛綸  
 黃門飛鞞不動塵  
 御廚絡繹送八珍  
 簫鼓哀吟感鬼神  
 賓從雜選實要津  
 後來鞍馬何逡巡  
 當軒下馬入錦茵  
 楊花雪落覆白蘋  
 青鳥飛去銜紅巾  
 炙手可熱勢絕倫  
 慎莫近前丞相嗔

頭上には何の有る所ぞ  
 翠微<sup>おうよう</sup>の匳葉<sup>びんしん</sup> 鬢脣<sup>びんしん</sup>に垂る  
 背後には何の見る所ぞ  
 珠は腰<sup>ようきゆう</sup>極<sup>きゆう</sup>を圧<sup>あ</sup>して穩<sup>ゆ</sup>やかに身<sup>み</sup>に称<sup>かな</sup>う  
 就<sup>なかんずく</sup>中<sup>ちゆう</sup> 雲幕<sup>うんぼく</sup>なる椒房<sup>しょうぼう</sup>の親<sup>か</sup>  
 名<sup>な</sup>を賜<sup>たま</sup>う 大<sup>だい</sup>國<sup>こく</sup>の號<sup>ごう</sup>と秦<sup>しん</sup>と  
 紫駝<sup>し</sup>の峰<sup>ほう</sup>は 翠釜<sup>すいふ</sup>より出<sup>い</sup>で  
 水精<sup>すいせい</sup>の盤<sup>ばん</sup>に 素鱗<sup>そりん</sup>行<sup>い</sup>く  
 犀箸<sup>さいしよ</sup>は厭<sup>えん</sup>飫<sup>よ</sup>して久<sup>きう</sup>しく未<sup>み</sup>だ下<sup>くだ</sup>されず  
 鑿<sup>らんとう</sup>刀<sup>とう</sup>は縷<sup>る</sup>切<sup>せつ</sup>するも空<sup>くう</sup>しく紛<sup>ふん</sup>綸<sup>りん</sup>  
 黃門<sup>たずな</sup>は鞞<sup>ぎん</sup>を飛<sup>と</sup>ばして塵<sup>ちん</sup>を動<sup>うご</sup>かさず  
 御廚<sup>ぎょ</sup>は絡<sup>らく</sup>繹<sup>えき</sup>として八<sup>は</sup>珍<sup>しん</sup>を送<sup>おく</sup>る  
 簫鼓<sup>しょうこ</sup>は哀<sup>あい</sup>吟<sup>いん</sup>して鬼<sup>き</sup>神<sup>しん</sup>をも感<sup>か</sup>ぜしめ  
 賓從<sup>びんじゆう</sup>は雜<sup>ざ</sup>選<sup>せん</sup>として要<sup>よう</sup>津<sup>しん</sup>に実<sup>ま</sup>てり  
 後<sup>ご</sup>れ来<sup>き</sup>たる鞍<sup>あん</sup>馬<sup>ま</sup>は何<sup>なに</sup>ぞ逡<sup>しゆん</sup>巡<sup>すん</sup>たる  
 軒<sup>けん</sup>に当<sup>あた</sup>りて馬<sup>ま</sup>より下<sup>くだ</sup>り錦<sup>きん</sup>茵<sup>いん</sup>に入<sup>い</sup>る  
 楊<sup>やう</sup>花<sup>か</sup>は雪<sup>ゆき</sup>のごとく落<sup>お</sup>ちて白<sup>はく</sup>蘋<sup>ひん</sup>を覆<sup>おほ</sup>い  
 青<sup>せい</sup>鳥<sup>てう</sup>は飛<sup>と</sup>び去<sup>さ</sup>りて紅<sup>こう</sup>巾<sup>きん</sup>を銜<sup>くわ</sup>う  
 手<sup>て</sup>を炙<sup>あぶ</sup>らば熱<sup>ねつ</sup>す可<sup>か</sup>し 勢<sup>せい</sup>いは絶<sup>けつ</sup>倫<sup>りん</sup>たり  
 慎<sup>しん</sup>しみて近<sup>きん</sup>前<sup>ぜん</sup>する莫<sup>な</sup>かれ 丞<sup>じゆう</sup>相<sup>しゆう</sup>嗔<sup>ちん</sup>らん

杜甫「麗人行」は、玄宗皇帝の寵姫、楊貴妃を出した楊家一門が、都長安の西南にある曲江の水辺に豪華な遊びをするさまを批判的に描く詩であり、Bethgeの(15) <Die Frau auf dem Blumenboot>のように、悲しみにくれる美女を感傷的・象徴的な筆致で描く詩ではない。水に関係する美女（一方は水辺、もう一方は舟上）を描いている点で共通するだけで両者の懸隔は著しいものがある。しかし、杜甫詩にほかに合致する詩もないことから、本稿でも <Die Frau auf dem Blumenboot> の原詩は「麗人行」としておく。堀辰雄はこのドイツ語訳の原詩として、杜甫詩のなかにふさわしいものを見つけられることができず、特定を断念したのであろう。

## 三

ところで、堀辰雄の③杜甫訳詩が Bethge, *Pfirsichblüten aus China* の杜甫詩15首を日本語に

訳したものであることは、本稿が始めて指摘するところである。この15首を収録する筑摩書房版『堀辰雄全集』第七巻（下）も巻末の「解題」でこのことに触れることはない。

上掲の内山知也氏論文1.「堀辰雄の《支那趣味》」では、堀辰雄所蔵の *Pfirsichblüten aus China* を調査して朱筆の書き込みを発見しているにもかかわらず、内山氏著書3.『堀辰雄 杜甫詩ノオト』では、③杜甫訳詩を「訳文はまだ堀辰雄独自の流暢さを持つに至らず、完成度の低いものである」と述べる。「流暢さを持つに至らないのは、ドイツ語訳をそのまま和訳したからなのであるが、内山氏はそのことを指摘していない。岡本文子「堀辰雄・杜甫訳詩考」（『和洋女子大学紀要 文系編』第27号、1987年3月）に至っては、*Pfirsichblüten aus China* を見ることなく、堀辰雄の杜甫訳詩について論を進めている。

*Pfirsichblüten aus China* と堀辰雄③杜甫訳詩の関係で特に注目すべきは、(16) < Herbst in der Fremde >・(17) < Schmerzliche Erinnerung >・(19) < Biage >・(20) < Herbst > の4首である。これらはいずれも杜甫晩年の組詩「秋興八首」から採られたものであるが、堀辰雄所蔵の *Pfirsichblüten aus China* には朱筆の書き込みがない、すなわち、堀辰雄は原詩の推定をしていない。その一方で、③（杜甫訳詩）では、4首すべてに対してドイツ語訳からの日本語訳を試みている。

この③（杜甫訳詩）では、まず自筆ノート34・35頁にかけて [10]「嘆き」が記される。

(19) < Biage >

KUAM tausend Herde zählt der Flecken, wo  
Inc in Verbannung lebe. Festungsmaurn  
Umgeben ihn auf düstern Bergeshöhn.

Den Fluß entlang stehn kleine, arme Hütten  
Auf Hügeln, grauer Dunst ist um sie her,  
Ich lasse hier und dort mich rastend hin.

Die Fischerbarken ziehn den Fluß zu Tale,  
Die Schwalben sammeln sich in dichten Scharen,  
Um in den warmen Süden fortzuziehn.

[10]「嘆き」

私が追放されられてゐるこの場所はやつと千の窠を数へる。城壁はそれを陰鬱な山嶺にまで囲らせてゐる。

流れに沿うて小さな、貧相な家々が丘の上に立つてゐる。灰色の煙がそのまはりにある。私はここかしこにわが身を憩はせる。漁舟は川を谷まで走つてゆく。燕は群がり集つてゐる、暗い南の方へ向ふて夕に。



Ich habe meine Pflicht getan, als ich  
Beim Kaiser noch in Gunst stand. Andre wurden  
Berühmt und groß. Warum verstieß man mich?

Mit Wehmut denke ich an die Genossen  
Der Studienzeit; ach, sie sind weit von hier,  
Und Ehren sind und Reichtum um sie her.

Um diese Stunde, da ich einsam klage,  
Sind sie gewiß zu Pferde, schön gekleidet,  
Und reiten durch die Hauptstadt, froh und leicht…

私はまだ王の側で寵愛されてゐたとき、自分の本分を尽した。他のものらは有名になり、えらくなつた。何故、私は追放せられ〈れ〉た。私は哀愁をもつて学生時の仲間を考へた。あゝ、彼等はこゝから遠い、そして栄華と富とが彼等のまわりにある。私が一人で歌っているこの時に、彼等は美装して馬に乗り、首府を近〈く〉まで、愉しげに、軽々と乗つてゆく……。

これは明らかに以下の杜甫詩の翻訳である。

「秋興八首」其三

千家山郭静朝暉  
一日江楼坐翠微  
信宿漁人還汎汎  
清秋燕子故飛飛  
匡衡抗疏功名薄  
劉向伝経心事違  
同学少年多不賤  
五陵衣馬自輕肥

千家の山郭 朝暉 静かなり  
一日 江楼 翠微に坐す  
信宿の漁人は還た汎汎  
清秋の燕子は故らに飛飛  
匡衡は疏を抗つりて功名薄く  
劉向は経を伝えて心事違  
同学の少年 多くは賤しからず  
五陵の衣馬は自ずから軽肥

次に自筆ノート36頁に [11] 「秋」が記される。これは (20) <Herbst> を訳したもので、ノート46頁に同詩の翻訳が続けられている。

## (19) &lt; Herbst &gt;

IN der Verbannung düster Einsamkeit  
 Laß ich nicht ab, mit sehnsuchtsvollen Augen  
 Den Krümmungen des Flusses nachzuschauen.

Auf hunderte von Meilen kann ich sehn,  
 Wie sich der Ostwind in die Wolken legt  
 Und sie vereinigt mit dem Dunst des Herbstes.

Der gleiche Dunst weht jetzt um jene Blumen,  
 Die ferne, ferne am Palast des Kaisers  
 Süß duftend bei des Herrschers Fenstern stehn.

Wie endlos fern die Vorhänge aus Perlen,  
 Gleich Jade glänzend, und die edeln Säulen,  
 Die Gärten, wo die gelben Störche gehn.

Und dann die Dschunke mit dem schlanken Maste  
 Aus Elfenbein und mit den seidnen Segeln,  
 Umgaukelt von der Möwen weißer Schar.

O wilde Qual, das Haupt in jene Richtung  
 Zu wenden, wo die liebe Hauptstadt schimmert  
 Mit Sang und Tanz und allem Glück der Welt!

## [11] 秋

(引用者注、ノート36頁)

かく追放せられて陰鬱な  
 孤独を私は自ら放さぬ、あ  
 くがれに充ちた目をして川  
 の屈折を追ふてゐる。百里  
 のかなたに、私は、いかに  
 東風が雲のなかに横つてゐ  
 るか、それが秋の烟と一つ  
 になつてゐるのかを見るこ  
 とが出来た。同じ烟がいま  
 花のまはりに翻つてゐる、  
 (引用者注、ノート45頁)  
 君王の窓のそばに香しく立  
 つてゐる。

いかに果てしなく珠の簾  
 がJadeのやうにかがやきな  
 がら、

気高い楊や、黄いろい鸛  
 が飛んでゆく夜  
 そして象牙の檣と後の帆と  
 のついた、三式御船のまは  
 りで白い鷗の群が飛び返つ  
 てゐる。

おゝ、愛する首府が歌と  
 踊りと世界の幸とてかがや  
 いてゐる、方向へ首を回ら  
 しめた荒涼たる苦悩よ!

1980年筑摩版『堀辰雄全集』は、自筆ノート37頁を [11] 「秋」の後半部に充てているが、それはよろしくない。<sup>3)</sup> 後述するように、自筆ノート37頁は [14] 「異郷の愁」の後半部に相当する。

上掲の Bethge の (19) < Herbst >、及びそれを翻訳した堀辰雄の自筆ノート36頁・45頁の原詩は、以下の杜甫詩である。

## 「秋興八首」其六

瞿唐峡口曲江頭  
万里風煙接素秋  
花萼夾城通御氣  
芙蓉小苑入辺愁  
朱簾繡柱圉黃鶴  
錦纜牙檣起白鷗  
迴首可憐歌舞地  
秦中自古帝王州

くとう	瞿唐の峡口	ほとり	曲江の頭
	万里	風煙	素秋に接す
	花萼の夾城	ぎよき	御氣通い
	芙蓉の小苑	へんしゅう	辺愁入る
	朱簾繡柱		黄鶴を囲み
	錦纜牙檣		白鷗を起たしむ
	首を迴らせば		憐れむ可し
	秦中は古え自り		帝王の州

続いて、自筆ノート38頁に [12] 「痛しき記憶」が記される。これは (13) < Schmerzliche Erinnerung > を訳したもので、ノート31頁に同詩の翻訳が続けられている。

## (13) &lt; Schmerzliche Erinnerung &gt;

WIE oft she ich in schmerzlicher Erinnerung  
Den kapriziös geformten Pavillon  
Auftragen, drin so gern der Kaiser schlief.  
  
Er stand im dunkeln Bergland von Tsi-Ko,  
Das sich mit seinen Gipfeln malerisch  
Im großen, blauen Flusse widerspiegelt.  
  
Am Ufer ward auf ungeheuern Feldern  
Duftender Reis geerntet. Papageien  
Schwärmten herbei und pickten Körner auf.  
  
Reizende junge Frauen gingen in

## [12] 「痛しき追憶」

いかに屢々私は痛ましき  
追憶の裡に、帝がいつも好  
んで眠られた、気まぐれな  
形をした亭を蘇らせたか。  
それは Tsi-ko のうすぐらい  
山地に立つてゐてその山の  
頂は、大きな、青い流れと  
絵画的に対照してゐる……  
  
岸には莫大な野の上に芳  
しい米がとり入れられてゐ  
る。  
  
鸚鵡はその近くに群がり、  
粒を摘んでゐる。魅惑的な

Den kaiserlichen Gärten auf und nieder,  
Das Grün des Frühlings lachte um sie her.

Berühmt, unsterblich waren die Genossen,  
Mit denen ich an weichen Abenden  
Gemächlich auf den klaren Seen fuhr.

Was für glückselige Gedichte hab ich  
Damals mit leichtem Pinsel hingeschrieben  
In tausend Formen, die ich neu erfand.

Und heute? Meine Haare sind geblichen,  
Die alte Stirne senk ich müd zur Erde,  
Und was ich sing, ist Jammer nur und Gram!

若い女たちは帝の庭の中を  
あちこち歩み、春の緑が彼  
女らのまはりで笑ひさざめ  
く。私が一しよに柔かな夜  
に明るい水の上に愉しく舟  
して、仲間たちは有名で、  
不死であった。

何のために私はその頃、  
軽い筆でもつて幸福な詩を  
私の新しく生じた幾多の詩  
体で書いたか、そしていま  
では、私の髪は白くなり、  
私は老いた額をつかれてう  
なだらしてゐる、そして私  
の歌ふ歌は、失望落胆の歌  
ばかり。

上掲の Bethge の (13) < Schmerzliche Erinnerung >、及びそれを翻訳した堀辰雄の自筆ノート  
38頁・31頁の原詩は、以下の杜甫詩である。

「秋興八首」其八

昆吾御宿自逶迤  
紫閣峰陰入漢陂  
香稻啄餘鸚鵡粒  
碧梧棲老鳳凰枝  
佳人拾翠春相問  
仙侶同舟晚更移  
綵筆昔遊干氣象  
白頭吟望苦低垂

昆吾 御宿 自のずから<sup>い</sup>逶迤たり  
紫閣の峰陰<sup>び</sup>漢陂に入る  
香稻<sup>つ</sup>啄み余す 鸚鵡の粒  
碧梧 棲み老ゆ 鳳凰の枝  
佳人と翠を拾いて春に相い問い  
仙侶と舟を<sup>とも</sup>同にして晩に更に移る  
綵筆<sup>さいひつ</sup>は 昔遊 氣象を干せしに  
白頭 吟望し苦しみて低垂す

自筆ノート43頁には [14] 「異郷の愁」が記される。これは (16) < Herbst in der Fremde >

を訳したもので、ノート37頁に同詩の翻訳が続けられている。

(16) < Herbst in der Fremde >

DER Reif des Herbstes, der wie Jade schimmert,  
Liegt auf den zarten Zweigen der Platanen,  
Die ragen bleich und welk in dünner Luft.

Durch das Gebirge, durch die Felsenschluchten  
Jagt kalter Wind; er fängt sich in den Bäumen,  
Und seine Seufzer irren durch das Laub.

Am Horizont sehe ich den breiten Strom,  
Er trägt auf seinen schnell bewegten Wogen  
Das Bild des Himmels blau und märchenhaft.

Der Wind reißt von den Gipfeln die Gebilde  
Der Wolken nieder, fein wie Wattetupfen,  
Und mischt sie mit dem grauen Dunst der Welt.

Ich bin in der Verbannung. Zweimal schon  
Sah ich durch meine sehnsuchtsvollen Tränen  
Die üppige Pracht der Chrysanthenen blühen

Ich bin wie eine Barke, die am Ufer  
Durch Eisenketten festgehalten wird. —  
Die ferne Heimat kann ich nicht erreichen.

Die Leute sind geschäftig bei der Arbeit,  
Sich Kleider für den Winter herzustellen,  
Bald sind die rauhen, kalten Tage da.

[14] 「異郷の愁」

〔引用者注、ノート43頁〕

秋の霜が、Jadeのやうに  
微かに光りながら、□落る  
空気の中に□ためて、凋ん  
だまま、突き出てゐる〈る〉  
鈴懸のやはらかな枝の上に  
置かれてゐる。

山や、溪谷を越えて、寒  
い風が吹く。それは木々の  
中へ捕へられる、そしてそ  
の歎息は木の葉を返してさ  
まよふ。

地平のかなたに私は広々  
とした流れをみる、それに  
その早く動く波の上に、空  
の姿を青々と□□めいて運  
んでゐる。風が雲の像を山  
の頂から引き裂いてくる、  
綿の片のやうに美しく、そ  
してこの世の灰色の煙と一  
しよにそれを混ぜあわす。  
私は追放されてゐる身だ。  
私はすでに二度も私のあく  
がれに充ちた涙を□して

〔引用者注、ノート37頁〕

菊の花が見事に咲いてゐ  
るのを見た。

私は、岸に鉄の鎖でつな

Die Sonne geht. Ich höre von den Hügeln  
Den Schlag der Drescher auf die harten Tennen, —  
Ein Lied, das mir das Herz noch ganz zerreißt!

がれてゐる小舟のやうだ、  
— 私は遙かなる故郷に到達できない。人々は冬の着物を繕ふ仕事に忙しい、やがて粗い、寒い日が来るので。

日は没した。私は丘の上から打禾□の土に打禾者の打つ音をきく。— いまもなほ私の心を引き裂く一つの歌を。

1980年筑摩版『堀辰雄全集』は、自筆ノート45頁を [14]「異郷の愁」の後半部に充てているが、それはよろしくない。前掲のごとく、自筆ノート45頁は [11]「秋」の後半部に相当する。

上掲の Bethge の (16) < Herbst in der Fremde >、及びそれを翻訳した堀辰雄の自筆ノート43頁・37頁の原詩は、以下の杜甫詩である。

「秋興八首」其一

玉露凋傷楓樹林  
巫山巫峽氣蕭森  
江間波浪兼天湧  
寒上風雲接地陰  
叢菊兩開他日淚  
孤舟一繫故園心  
寒衣處處催刀尺  
白帝城高急暮砧

玉露 凋傷す 楓樹の林  
巫山巫峽 氣 <sup>しょうせん</sup> 蕭森  
江間の波浪は天を兼ねて湧き  
寒上の風雲は地に接して陰<sup>くも</sup>  
叢菊 <sup>ふた</sup> 両たび開く 他日の涙  
孤舟 一たび繫ぐ 故園の心  
寒衣 処処 刀尺を催し  
白帝 城高くして <sup>ぼちんきゆう</sup> 暮砧急なり

堀辰雄は *Pfirsichblüten aus China* に採られた杜甫詩17首のすべてを日本語に訳しているわけではない。その一方で、「秋興八首」第一・三・六・八首に対しては、4首すべてを日本語に訳していることから、堀辰雄がそのドイツ語訳の内容に強い興味を覚えていたであろうことは疑いを容れない。

しかし、自ら所蔵する *Pfirsichblüten aus China* 書上では詩題の特定を行っていない。これは、(16) < Herbst in der Fremde >・(17) < Schmerzliche Erinnerung >・(19) < Biage >・(20) < Herbst > の4首が「秋興八首」であることに気づかなかつたためであろう。堀辰雄の訳詩には、この推測を確かなものとする証拠がある。[12]「痛しき追憶」で堀はドイツ語訳文にある“Tsi-ko”をそのまま使っていることに留意されたい。堀がもし、この詩が「秋興八首」第八首であることに気づいていたら、杜甫詩の原文を見て“Tsi-ko”は「紫閣」であることがわかるはずである。ちなみに「紫閣 (Tsi-ko)」が唐の都長安の東南にある終南山山脈の一峰「紫閣峰」。

Bethgeによる杜甫詩4首のドイツ語訳を日本語に訳しながら、その原詩が特定できなかったことに、堀辰雄はさらなる興味をかき立てられたに違いない。あるいは深い悔恨を遺した、と言うべきであろうか。③杜甫訳詩を記したあとも、堀辰雄は中国詩、特に杜甫詩に強い関心を抱き続けた。その結果生まれたのが、ノート②支那古詩(二)であると考えられる。②支那古詩(二)は杜甫詩15首の口語訳を収めるが、そのうち「秋興八首」全首の口語訳がこのノートの分量の半分以上を占めている。かつてBethgeのドイツ語訳で読んだ、「秋」や「追憶」を主題とする杜甫詩4首が、その後「秋興八首」であることに気づき、杜甫詩の注釈書を参考にしつつ原詩から翻訳した結果であろうと判断される。

1980年の筑摩書房版『堀辰雄全集』では、「②支那古詩(二)」→「③杜甫訳詩」の順で配列するが、この両者のノートが書かれたのは③の方が先であることは間違いないであろう。内山氏の3.『堀辰雄 杜甫詩ノート』は、ノート②が書かれた時期を昭和十八・九〔1943-44〕年と推定する。それに従えば、ノート③は昭和十八・九年より前に書かれたものと考えられる。

#### 四

最後に、Bethgeの *Pfirsichblüten aus China* (ドイツ) が依拠したところの、Gautierの *Le Livre de Jade* (フランス) について、堀辰雄との関係を紹介する。堀辰雄には「芥川龍之介の読書」<sup>4)</sup>と題するノートがある。これについて、内山氏の3.『堀辰雄 杜甫詩ノート』は以下のように述べる。

堀辰雄の三人の師、芥川龍之介・佐藤春夫・室生犀星を見ると、前の二人は著しい中国風文人趣味の持主であるが、犀星は全くその資質を欠く。

堀辰雄は師芥川の自殺という恐るべき衝撃から立ち直るために、師の挫折の原因を見きわめ、そこから出発しようとした。そこには、いかにも冷静で、強固な意志を抱いた弟子の姿を見ることができる。彼は芥川全集の編集作業に従事しながら、昭和二年、すなわち

芥川自殺の杜詩から遡上して師の作品を読み、師の愛読し、かつ引用した書籍の名を書き抜いて「芥川龍之介の読書」と題するノートを作った。そのノートに書き出された夥しい書籍の中に、非常に多くの中国の詩人や画家の名、または書名を発見する。そしてその何人かは後に堀辰雄が心をよせるものになるのである。

そして、「芥川龍之介の読書」には Gautier の *Le Livre de Jade* が登場する。

### パステルの龍

[大正十三年]

- Judith Gautier 名高いゴオティエの娘さんは、カチユル・マンデスと別れた後、Tintun-Ling と云ふ支那人に支那語を習ったさうである。が、李太白や杜少陵の訳詩を見ても、訳詩とはどうも受け取れない。まづ八分までは女史自身の創作と心得て然るべきであらう。
- Eunice Tietjens ユニス・テイツチエンズはずっと新しい。これは実際、支那の地を踏んだ、現存の亜米利加婦人である。日本ではエミイ・ロオウエル女史<sup>5)</sup>が有名だが、テイツチエンズも庸才ではない。女史の本は二冊ある。これは1917年に出た、二冊の *Profiles from China* から訳した。

つまり、堀辰雄はかなり早い時期に、師芥川龍之介が Gautier の *Le Livre de Jade* を読んでいたことを知っていたのである。本稿では、堀辰雄が同書を読んでいたか、あるいは所蔵していたか、確かめることはできなかった。しかし、*Pfirsichblüten aus China* の依拠した同書が、杜甫の詩を「訳詩」としてではなく、「八分までは女史自身の創作」としてフランス語にされたと師芥川が言及していることは知っていたのである。

本稿では、Bethge の *Pfirsichblüten aus China* (ドイツ) を日本語訳した堀辰雄の③杜甫訳詩は、

杜甫詩原文 → Gautier のフランス語訳 = 「八分までは女史自身の創作」  
 → Bethge のドイツ語訳 → 堀辰雄の日本語訳

といった経路をとっていることを明らかにした。そして、フランス語訳の時点で「創作」と位置づけている師芥川のコメントに接して、堀は Bethge のドイツ語訳もまた「創作」なのではな



いか、と考えながら③杜甫訳詩を記したのではなかろうか。

〔注〕

- (1) 最上英明「〔研究ノート〕マーラーの《大地の歌》—唐詩からの変遷—（第1～3楽章）」（「香川大学経済論叢」第76巻第3号、2003年）・「マーラーの《大地の歌》—唐詩からの変遷—（第4～6楽章）」（「香川大学経済論叢」第76巻第4号、2004年3月）参照。
- (2) 本稿では杜甫詩のテキストとして、〔清〕銭謙益注『銭注杜詩』（上海古籍出版社、2009年10月）を用いた。なお、杜甫詩及び唐詩について、堀辰雄自身がどのようなテキストを用いていたのか、究明することは重要な問題であるが、この問題は別の機会で論じたい。
- (3) 1980年の筑摩書房版『堀辰雄全集』では、[12]「痛い追憶」を前半部は自筆ノート38頁から、後半部は31頁からとってきて編集している。つまり、筑摩版『全集』はノートの頁順にそのまま従って翻字・編集しているわけではないので、ほかの詩においても、杜甫詩の訳文として内容的に整合性のとれる編集をすべきであろう。
- (4) 『堀辰雄全集』第七巻（下）（筑摩書房、1980年6月）。
- (5) 「エミイ・ロオウエル女史」とは、アメリカの詩人で中国詩を英訳した Amy Lowell のこと。彼女の *Fir-Flower Tablets* 松花箋: *Poems From the Chinese.*, Cambridge: 1921 については、長谷部剛「英語のなかの杜甫」（「関西大学東西学術研究所紀要」第47輯、2014年4月）を参照されたい。

